

第2節 方形周溝墓の埋没過程

1. はじめに

本稿では、方形周溝墓が墓・儀礼の場としての機能を終え、周溝が埋没していく過程を、周溝の堆積層と出土遺物を手掛かりに考察を試みたい。

方形周溝墓周溝の埋没過程については、福田 聖の研究がある。福田は関東地方の弥生時代終末～古墳時代初頭の周溝の、底と上層から出土した土器について器種組成と出土状況について検討をおこなった。この結果から方形周溝墓が埋没する過程で、火を用いた儀礼がおこなわれ、その痕跡として溝中土坑が残存する場合があることを想定した（福田 1991）。また大庭重信は、近畿地方の方形周溝墓溝内から出土する大量土器廃棄に注目し分析を試みた。この結果、土器群は総数50個体前後かそれ以上である点、周溝がある程度埋没した後に投棄されている点、口縁部などを意識的に打ち欠いたり胴部を穿孔したりするものが含まれない点を明らかにした。土器群の性格として、福田の説を支持し儀礼行為に伴うもので、墓制に表現された新たな集団的結合関係の強化や安定を目的としたものと考えた（大庭 1995）。

このように、方形周溝墓周溝の埋没過程については、それが「墓」として認識されている時期については儀礼行為がおこなわれたと解釈されている。しかし、「墓」である記憶が時間の経過と共に忘却された時期についてはどのように方形周溝墓は認識されていたのかという疑問が生じる。しかし、この設問への回答は比較的安易に導き出せよう。時間の経過と共に、周溝は埋没し痕跡をほとんど留めない状態になる。これにより人々の記憶の中からは、そこが「墓」という忌みの場であるという認識が段々と薄らぎ、ついには完全に忘却されてしまう、といった想定であり事実もほぼそうであったろう。しかし、例外もあるようだ。大阪府古川遺跡では、周溝がかなりの期間「単なる溝」として機能したと考えられる状態が観察された。このような状態まで残存した周溝については、これまで注目されることはなかった。そこで、古川遺跡を例に、周辺の類例をいくつかあげながら「墓」としての機能を終えた周溝の在り方を検討し、その後、どのように認識されていたかを若干考えてみたい。

2. 方形周溝墓周溝の上層と下層

ここでは方形周溝墓周溝が埋没までに長時間を要した実例として、古川遺跡例といいくつかの類例をあげ、それぞれの場合どのように報告者には、この現象が捉えられてきたかを概観する（図29）。

《古川遺跡》（本報告）

古川遺跡の方形周溝墓群のうち、方形周溝墓1・2・3からは古墳時代後期や奈良時代の遺物が出土した。このため当初はこれらを古墳と認識していたが、調査が進行するに従って、周溝の埋土は最上・上・下層の3層に分かれることが判明し、下層には須恵器を全く包含せず、弥生土器のみしか出土しないことがわかつた。方形周溝墓1周溝の堆積土は3層に大別可である。最上層の土質は粘土で、奈良時代以降の遺物が出土した。上層の土質は粘土で、古墳時代後期の遺物が出土した。下層の土質はシルト～砂で、弥生時代前期末の遺物が出土した。方形周溝墓2・3周溝は堆積土は3層に大別可である。最上層の土質は粘土で、奈良時代以降の遺物が出土した。上層の土質は粘土で、古墳時代後期の遺物が出土した。下層の土質は砂混じり粘土～砂で、弥生時代中期初頭の遺物が出土した。出土遺物からすれば、いずれも上層と下層の時間差は約500年あることになる。

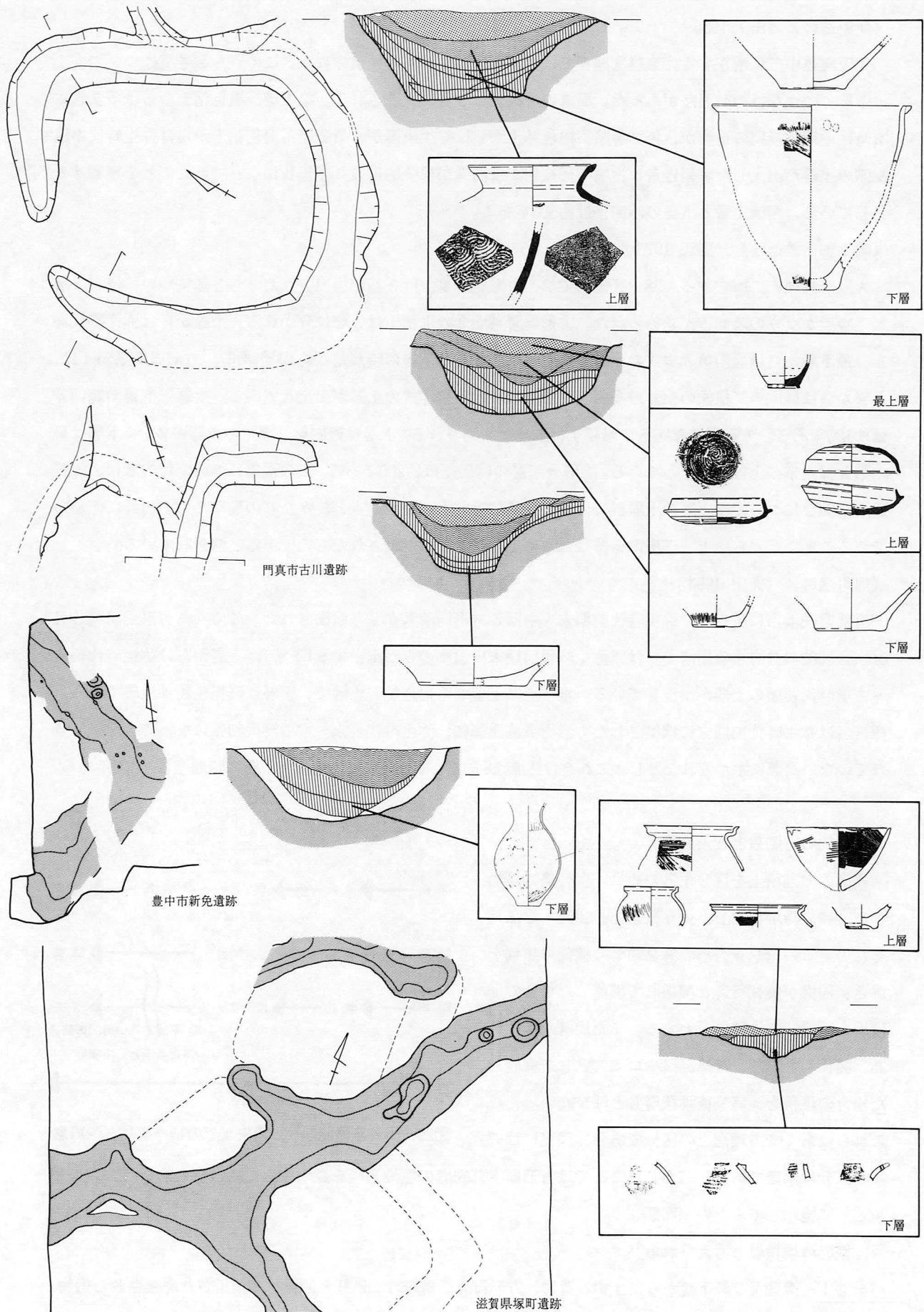


図 28 周溝埋没までに長期間機能した方形周溝墓の諸例 (各文献より作成)

《新免遺跡》（田上 1986）

大阪府豊中市に所在する。第14次調査では方形周溝墓が計4基検出された。このうち2号墓について、上・下層でのかなりの時間差があった。周溝の堆積土は3層に大別される。第1層淡黒色粘土からは多量の古墳時代中期～後期の遺物が、第2層暗茶褐色粘土からは弥生土器が、第3層茶褐色粘土からは弥生時代中期初頭の土器が出土した。報告者は古墳時代後期まで周溝が部分的に残り窪地状になっていたことを窺わせるとしている。周溝上層と下層の時間差は約500年ある。

《岬上郡衙跡遺跡》（堀江 1973）

大阪府高槻市に所在する。38-K地区では、方形周溝墓が計5基が検出されたうち3基については、上層と下層でかなりの時間差が認められた。方形周溝墓No.2の堆積土は3層に分かれる。上層からは弥生時代終末、最下層からは畿内第II様式の土器が出土した。上層と下層の時間差は約400年ある。方形周溝墓No.4は、上層からは畿内第V様式の土器が多い。下層では畿内第III様式の土器が出土している。上層と下層の時間差は約130年ある。方形周溝墓No.5の堆積土は3層に大別される。上層は畿内第V様式の土器が多い。下層は畿内第II様式末の土器が出土している。上層と下層の時間差は約200年ある。この現象について報告者は、方形周溝墓No.2については上層の土器群にはほぼ完形品に近いものが多い点と、かなりの礫がこの土器群に伴なっていることなどから、上、下層の土器はともに方形周溝墓に供献されたものであると解釈している。

《塚町遺跡》（丸山 1994）

滋賀県長浜市に所在し、弥生時代前期末～中期の方形周溝墓が9基検出された。このうち方形周溝墓S X 01～S X 05の共有する周溝からは、弥生時代前期末の遺物のみが出土する（下層）。上層からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が出土している。堆積土は上層が暗褐色粘質土層で、下層は暗褐色粗砂土層である。報告者は弥生時代前期末に構築された方形周溝墓周溝に、弥生時代終末～古墳時代初頭になって、埋没しきれていない周溝に水が流れたとし、これを自然流路SR02と捉えている。上層と下層の時間差は約400年ある。

3. 遺物の時間差と埋没過程

周溝内の堆積土を区分するために、趙哲済の提唱する「機能時堆積層」という概念（趙1995）を採用したい。この概念を方形周溝墓周溝の機能に焦点を置き、周溝が儀礼行為と関係して機能した場合の堆積層を「機能時堆積層」とする。また周溝が儀礼行為と関係しないで、自然流路やゴミ穴として機能した場合の堆積を「廃棄後堆積層」と呼びたい。ただこれらはあくまで理念上の区分であり、現実には両者の区分は困難である。しかし、ここでは方形周溝墓周溝の埋没過程を説明するための便宜的なパタンモデルとして提示してみたい（図29）。

A. 機能時堆積層と考えられるパタン

パタン1 溝底及び最下層から出土する遺物、方形周溝墓構築時に儀礼と関係して使用され廃棄された遺物、構築から堆積までの経過時間は非常に短い。

パタン2 溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係したと考えられる遺物、方形周溝墓埋没過程で儀礼行

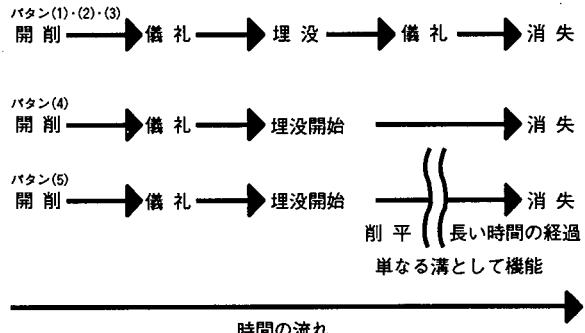


図29 周溝墓の開削から消失までの様々なパタン概念

為と関係し廃棄された遺物、方形周溝墓の構築から堆積までの経過時間は比較的短い。この場合、下層にはすでにパタン1で堆積した遺物があることになる。

パタン3 溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係したと考えられる遺物、方形周溝墓埋没過程で儀礼行為と関係し廃棄された遺物、方形周溝墓の構築から堆積まで時間をかけて埋没していき、継続した儀礼行為が行われる。もしくは何らかの形で墓としての場という意識が継続・再認識され再び儀礼行為が行われる。この場合、下層にはすでにパタン1で堆積した遺物があることになる。

B. 廃棄後堆積層と考えられるパタン

パタン4 溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係しないと考えられる遺物、方形周溝墓は構築時の儀礼行為が行われた後、埋没過程では儀礼行為は行われず埋没が完了し消滅した場合での堆積。方形周溝墓の構築から堆積までの経過時間は比較的短い。この場合も、下層にはすでにパタン1で堆積した遺物があることになる。

パタン5 溝上層から出土する遺物で儀礼行為と関係しないと考えられる遺物、方形周溝墓は構築時の儀礼行為が行われた後、埋没過程では儀礼行為は行われず埋没が完了し消滅した場合での堆積。方形周溝墓の構築から堆積までの経過時間は非常に長い。この場合も、下層にはすでにパタン1で堆積した遺物があることになる。

方形周溝墓周溝の埋没過程に限定すれば、上記で設定したパタン1単独では埋没は完了せず、他のパタンと複合することによって埋没が完了する。

先にあげた諸例はこれらのモデルのうち、何れに相当するのであろうか。パタン2に相当するのは、ここでは例示していないが、先の大庭が分析をおこなった大阪府豊中市蛍池北遺跡がある。参考のためここであげておくと、方形周溝墓3と方形周溝墓6の周溝上層から、弥生時代中期中葉の土器群が出土した。これらは周溝内に墳丘側からの崩落土がある程度たまつた後に堆積したものであると考えられる（服部・大庭編1995）。方形周溝墓3は削平により主体部が失われており、方形周溝墓の構築から周溝への土器大量廃棄までの経過時間を遺物によって計ることができない。方形周溝墓6は方形周溝墓3と同様に後世の削平を受け墳丘は完全に失われている。このため方形周溝墓3同様、方形周溝墓の構築から周溝への土器大量廃棄までの経過時間を遺物によって計ることができない。しかし、出土土器はいずれも弥生時代中期中葉に収まるものと考えられる。このことからやや強引に類推すれば、方形周溝墓の構築から大量の土器群が廃棄されるまでの間隔は、二世代の範囲に収まるともいえる。この類推から大庭の考える方形周溝墓埋没過程での儀礼行為に伴う大量土器廃棄は、二世代の範囲の中で行われたことになろう。このケースを普遍化はできないものの、人々の記憶の中に明確にこの場所が墓であるという事実が刻まれている期間は、二世代前後であるという一定の目安を示していると捉えておきたい。

パタン4に相当する事例をあげると、畿内では現状で類例を知らないが、神奈川県秦野市砂田台遺跡4号方形周溝墓がある。この方形周溝墓周溝内からは、弥生時代中期後葉の大量の土器・石器が出土した。報告者はこれらの遺物について、周溝内に周溝墓構築後、間もない時期に廃棄されたと解釈し、埋没していく周溝がさながらゴミ捨て場のような状態であったことを想定している（宍戸ほか1989）。砂田台遺跡の場合は、周溝墓構築から非常に短い期間でそこが墓であることが忘却され、周溝が単なる溝、ゴミ穴としてしか認識されていないことが窺える。これ程短期間での忘却はむしろ特異な例と考えた方がよいのだろうが、パタン2での一応の目安を参考にすれば、二世代を経過した以後は、序々に墓としての認識が薄らぎ忘却されてい

くのではないかと考えておきたい。とすれば、嶋上郡衙跡遺跡の諸例が問題となってくる。方形周溝墓No.4では上層と下層での時間差は130年前後である。上層出土土器の出土状況の詳細が不明であるため、判断不可能であるが、もし上層出土遺物が儀礼行為と無関係であれば、墓であることの忘却時間を勘案する好例となる。しかし、隣接する方形周溝墓No.2の周溝上層と下層の時間差が約400年もあるにもかかわらず、上層出土土器群は完形品のものが多いことなどから、儀礼行為に伴う廃棄である可能性が高い。そうすると、この空間が墓として長時間認識されていた可能性が高くなる。これはパタン3に相当する。この場合、当初の認識である「ここは墓である」という記憶が変容し、別の意味として機能している可能性も考慮しなければならないであろう。今後類例を検索し再検討をする問題である。

パタン5と考えられる例が、今回特に注目した現象である。古川遺跡例、新免遺跡例、塚町遺跡例がこれに相当すると考えられる。出土遺物からすれば、いずれも周溝の完全な埋没まで約400～500年の時間を要したことになる。この場合、そこがかつて墓であったことが、完全に忘却され周溝は単なる溝として認識されていたということであろう。

これらの方形周溝墓の立地は、大阪府下では淀川流域の低地遺跡に多いことが看取される。これに対して低地でも中河内地域では事例があまりみられない。これは堆積の速度と関係していると思われる。堆積土の量が多く、堆積速度も速い中河内地域では、方形周溝墓の埋没は急速であったことが考えられる。このため、周溝が後世まで長時間、存続することはほとんどなかったと思われる。これに対して、摂津地域や北河内地域では堆積速度はそれほど急速ではなかったために、方形周溝墓の周溝が埋没しきらない状態がよくみられた可能性が高いといえよう。

4. 小結

古川遺跡調査時の疑問を解決するため、方形周溝墓周溝が長時間をして埋没したと考えられる類例をあげ、墓としての機能を終えた方形周溝墓の周溝が埋没していく過程で、後世の人々にどのように認識されていたのか、墓であるという記憶はどれくらいの時間の経過で完全に忘却されるのかをいくつかのモデルを提示し考えてみた。この結果、古川遺跡の場合は、遺物の出土状況や経過時間を勘案すれば、墓という場であるという事実は完全に忘却された段階でも、周溝は単なる溝として長時間存在していたと考えられる。逆に、嶋上衙跡遺跡例のように、墓としての認識が相当後世まで継続している例も認められた。これらの問題についてはいずれ再検討を試みたい。（文章中敬称略）

（角南）

【引用・参考文献】

- 大庭重信 1995 「弥生時代中期の方形周溝墓にみられる大量土器廃棄について」『螢池北遺跡(宮の前遺跡)』 螢池北遺跡調査団・豊中市教育委員会
- 宍戸信悟ほか 1989 『砂田台遺跡』 I 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 田上雅則 1986 「新免遺跡第13・14次発掘調査概要報告」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要1985年度』 豊中市教育委員会
- 趙哲済 1995 「第5節 本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告書』Ⅷ (財)大阪市文化財協会
- 服部聰志・大庭重信編 1995 『螢池北遺跡(宮の前遺跡)』 螢池北遺跡調査団・豊中市教育委員会
- 福田聖 1991 「方形周溝墓と儀礼」『埼玉考古学論集』 埼玉考古学会
- 堀江門也 1973 『嶋上郡衙跡発掘調査概要・Ⅲ』 大阪府教育委員会
- 丸山雄二 1994 『塚町遺跡VI・VII』 長浜市教育委員会